「ケースから学ぶ就労支援プロセスの実際（演習)」

【事例概要】

羽田良 光（はたら こう）さんは、高次脳機能障害が疑われるが障害者手帳を取得せず、就労継続支援Ｂ型を利用する男性。

Ｂ型事業所では、主に施設外就労活動に参加し、一般就労に向けての準備に取り組んでいる。利用から一年後、ご本人とご家族から「経済的不安があり一日も早く一般就労をしたい、可能ならば施設外就労先の企業への求職を希望する」との申し出があった。企業にその旨を問い合わせたところ、一般採用は困難、障害者雇用枠での採用ならば検討するとの返答がある。

しかし、障害者手帳の取得についてはご本人・ご家族共に前向きになれず、更に、父親からはＢ型の工賃が低いとの理由で、Ｂ型のサービス利用を中止し、一般での求職活動をさせたいとの強い意向が示され、ご本人もそれを望まれたことで、再度、ハローワークで一般の求職活動を並行して支援したが結果的には就職には繋がらず。

Ｂ型事業所でも、就労アセスメントや生活アセスメントを実施すると共に、精神科での心理検査や障害者職業センターでの職業評価を受けながら、総合的に、障害者雇用枠での一般就労をめざすことをご本人・ご家族に繰り返し助言し、話し合いを積み重ねた。

支援を受けながら就労することについての合意は得られたが、障害者手帳の取得については合意に至らず、一般就労に近い就労継続支援Ａ型事業を利用しながら、再度、一般就労への準備をしていくことになった。

【利用予定事業所及び地域の状況】

利用事業所	就労継続支援事業Ａ型　定員 20 名 大半の利用者に知的障害がある、肢体・聴覚の重複障害のある人もいる。
事業所所在地の環境	Ｚ市：人口は 10 万人弱、人口の約 26%は 65 歳以上の高齢者であり、人口の 5%が外国人労働者とその家族、約 5 千人が障害者手帳を保持している。 土地の 62%が森林で周りを山々に囲まれた盆地。 県庁までは自動車で１時間、都市圏までは私鉄特急で１時間半程度かかる。 公共交通機関は年々減少し、行政バスが運行している程度で、自動車以外に長距離の移動手段はない。 産業は、第一次産業は減少しほとんどが兼業農家、新都市開発による工場誘致により第二次産業が増加傾向にある。 事業所は、市街地の中にあり、近くには大型のスーパーマーケットもある。
地域の社会資源の状況	福祉資源としては、高齢者福祉関係のサービスが多数を占めるが、身体・知的・精神の福祉事業をする法人も複数ある。社会福祉協議会が若者サポートステーションを運営。その他、生活困窮者自立支援事業に登録している事業所もある。 総合相談の窓口として「障がい者相談支援センター」を市が直接運営している。 また、本人が障害福祉サービスを利用する社会福祉法人には、就労継続支援Ａ型・Ｂ型、就労移行・生活介護、生活訓練、その他、居宅介護、短期入所、ＧＨや地域活動支援センターの各事業がある。併せて生活困窮者自立支援事業も実施している。精神科の病院も同エリアにあり、デイナイトケアをはじめ生活支援事業が増えている。隣市は、人口８万人弱の都市

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">圏のベットタウン。知的障害関係の総合福祉施設があり、総合支援法に定められた障害福祉サービスはほとんど揃っている。障害者就業・生活支援センター事業もある。その他、障害者職業センター、自閉症・発達障害支援センター等は、自宅のある地域から車で１時間半ほどの距離にある。</td></tr>
<tr><td>地域の
地場産業</td><td colspan="2">観光地であるが観光産業は盛んでない。
焼き物や伝統工芸品の地場産業があるが年々衰退している。以前は、家内工業の工場がたくさんあり、障害のある人の雇用もされていたが、最近はほとんどが閉鎖・倒産している。</td></tr>
<tr><td>日課</td><td colspan="2">＊平日　８：３０～１６：３０（内休憩６０分）
＊土日は休所、レク等の余暇活動は他事業の地域活動支援センターを利用</td></tr>
<tr><td rowspan="7">主な作業内容</td><td>作　業　内　容</td><td>賃金の状況</td></tr>
<tr><td>精肉工場での施設外就労活動</td><td rowspan="6">85,000 円～145,000 円</td></tr>
<tr><td>施設内での下請作業</td></tr>
<tr><td>福祉施設の厨房業務</td></tr>
<tr><td>製パン作業</td></tr>
<tr><td>文化財の清掃管理</td></tr>
<tr><td>福祉施設の清掃作業</td></tr>
</table>

【利用者のプロフィール(生活困窮者自立支援事業⇒就労継続支援 B 型事業所⇒就労継続支援 A 型事業所)】

<table>
<tr><td>性別・年齢</td><td>27 歳、男性、独身</td></tr>
<tr><td>身長・体重</td><td>身長 180ｃｍ、体重 100ｋｇ</td></tr>
<tr><td>生育歴</td><td>先天性心疾患(大動脈縮窄症・心室中隔欠損症)のため幼少期に 2 度の手術を行う。また、生後 3 ケ月時に院内感染が原因の急性脳症を発症。毎年心臓の定期健診を受けているが運動制限等はない。13 歳頃、高血圧の指摘を受け、降圧剤の服用を継続中。
保育所でわずかに発達の遅れが認められたが、小学校は普通学級、国語・算数は授業に付いていけず放課後等に担任から特別補講を受けた。中学校も普通学級、私立の高等学校へも進学し、通知表の評価は 5 段階で 1 及び 2 の評価。中学ではハンドボール部、高校ではサッカー部に在籍し、万年補欠だったが友人関係も良好で不登校もなく皆出席で卒業。
その後、私立大学(4 年制)へも進学、電車の乗り継ぎ等通学手段を覚えるまで時間がかかったが、順調に単位取得し卒業。
学齢期には、家庭生活上困ることもなく、心疾患以外の医療機関の受診や専門機関への相談もなく、福祉サービスの利用もない。</td></tr>
<tr><td>就労支援事業所利用の原因・経過など</td><td>大学時代、自宅近くのスーパーマーケットで品出しのアルバイトをする。レジ等他の業務はなく一定の品出しのみしていた。アルバイトは、自動車教習所との両立が難しくなり 2 年ほどで辞めた。また運転免許取得までに約 1 年かかり、筆記試験は 28 回目で合格した。
卒業と同時に大手外食チェーン店に社員として就職するが、短期記憶に弱みがあり仕事手順が覚えられず、仕事の段取りも苦手なため、パート社員からのいじめに遭い約 1 ケ月で退職。その後自宅にて 3 ケ月間引きこもりとなり、親族の勧めで、地元の社会福祉協議会が運営する若者サポートステーションを利用。一般の求職活動をするが就職に繋がらず。サポステの勧めで、就労継続支援 B 型の支援員を求職し、職場実習を体験する。</td></tr>
</table>

	職場実習時に、高次脳機能障害が疑われ、市の生活支援課の介入により、生活困窮者自立支援事業(就労訓練事業)の利用者として、民間社会福祉法人が運営する就労継続支援 B 型事業所にて半年間生産活動に携わる。(非雇用型で工賃あり)その間、就労アセスメントを受けた結果、障害者雇用枠での求職が適当との評価があったが、ご本人・両親共に障害者手帳取得には前向きになれず。ハローワークで一般の求職活動を並行して行ったが、就職には繋がらず。ポリテクセンターでの訓練を勧められたが、訓練内容が溶接・配線・パソコン等苦手分野とのことでご本人が拒否した。 **(B 型事業所の利用)** 生活困窮者自立支援事業の訓練終了時に、ご本人から「障害者手帳取得には抵抗があるが、B 型事業所での生産活動については継続したい」との申し出があり、市の障害福祉課と障害者相談支援センターに相談。その結果、精神科を受診し、医師の意見書に基づき障害福祉サービスを正式に利用することになった。 相談支援専門員と共に近隣の就労系事業所(A 型・B 型・移行含)を見学し、ご本人の希望により、主に施設外就労活動をしている B 型事業所の利用を開始した。ご本人・両親ともに一般就労への希望が強いことから、サービス等利用計画の総合的な援助の方針は、主に、一般就労へ向けての方向性を固め、就労アセスメントと生活アセスメントを共に行いながら、今後の人生と職業生活のイメージを作ることと設定した。 その後、一年間、施設外就労活動に主に取り組みながら、相談支援専門員や B 型事業所の職員等支援者と話し合いを続ける中で、精神科での心理判定や障害者職業センターでの職業評価を受けて、自分の弱み・強みを認識しながら障害受容に繋ぐ支援が行われた。 施設外就労活動での様子としては、生産活動の環境が変わると、1 週間程度パニックになり、体調不良を感じて生産ラインに入れないことがあり、施設外就労先 5 企業、10 ラインの生産活動全般にシフトで取り組むと共に、支援者と共に作業レポートを記入して、毎日の振り返りを行うことに取り組んだ。同時に、職業準備性ピラミットや就労準備性チェックシートの活用により、座学・個人ワーク・実践・記録・面談を繰り返し、一般就労に向けての準備を行った。 B 型利用開始後 1 年が経過し、本人は、施設外就労先の企業への求職を希望するが、企業からは一般採用は困難、障害者雇用枠での採用ならば検討するとの返答があるが、障害者手帳の取得についてはご本人・家族共に前向きになれず。更に、父親からは B 型の工賃が低いことを理由に、サービス利用を中止し、一般での求職活動をさせたいとの強い希望があり、ご本人も父親の意見に流されるところもあり、先が見通せない状況になっている。

【アセスメント参考事項】

項　目	現　　状	これまでの支援の経過や方針・課題等
住環境	Z 市の住宅地の一戸建て。公共交通機関は少ないが、自家用車で移動。両親との 3 人暮らし。	
障害の状況	障害支援区分なし WAIS-Ⅲ（FIQ72、言語理解 88、知覚統合 72、作	障害者手帳取得についてはご本人・両親共に前向きになれず。

	動記憶 83、処理速度 72)　境界線のため、知的障害の手帳は非該当。 (得意なこと) ・言葉の意味の理解、常識や社会ルールの理解 ・耳で聞いたことを記憶すること (苦手なこと) ・空間的な位置関係を正確に理解すること ・モノの一部を見て、全体像を想像すること ・場の空気を読んだり、察して動くこと ・桁数の多い計算 ・初めての作業を臨機応変に進めること	高次脳機能障害の症状が散見されるが、診断はされていない。
健　康面・身体の状況	先天性心疾患(大動脈縮窄症・心室中隔欠損症)のため幼少期に 2 度の手術を行う。 毎年心臓の定期健診を受けているが運動制限等はない。 13 歳の頃、高血圧の指摘を受け、その後、降圧剤の服用を継続中。内科には毎月通院している。 体重 100 kg超で、就職に向けダイエットに取り組むことを主治医や支援者に勧められている。	血圧、服薬管理は忘れてしまうことが多々あるため、母親がしている。 ご本人も母親に任せきりの状態。
ＡＤＬの状況	身の回りのことは自立。 調理、洗濯、掃除等の家事一般は母親がしているため経験が少ない。教えてくれる人がいればできると思われる。	B 型事業所で作業服の洗濯ができるようになる。母親も自宅で家事をする機会を増やしていくことに前向きである。
コミュニケーション	言葉での会話、常識、社会ルールの理解は平均的。聴覚的な記憶力もある程度はできる。 ただし、聞いたことを頭の中で整理したり、要点を掴むことは苦手なため、話が長くなったり複雑になると、的確な返答ができなかったり、指示とは違う行動をしてしまう。	学校生活や家庭生活では特別困難なことはなかったとのこと。 生産活動をする上で、自分の覚えやすい言葉でメモをとるよう勧めたり、わからない時は聞き直したり、確かめるように繰り返し支援している。
金銭管理	日常生活的な買い物等はできるが、金銭管理は母親がしている。ご本人は金銭管理の具体的な意味や方法はわかっていない様子。 普段、お金は使わないとのことで、財布を持たず生活をしている。	財布を持たずに外出していることを両親共に知らずにいた。 支援者が、通所する時や外出の際、緊急にお金が必要になることもあるので、財布に五千円程度お金を入れて持ち歩くように話すと、きっちり五千円入れた財布を常時持っている。
社会的マナー規則・交通ルール	常識や社会ルールは理解しており、逸脱するような言動はない。 自家用車を所有しているが、運転技術には不安はないが道に迷うことはしばしばある。 また、運転免許証は大切なものという理解で、携	交通ルール等、自分なりの解釈で理解したり、解決しようとする傾向があるので、座学を通じて、社会ルールや交通ルールの学び直しをする。

	帯せずに自宅に置いてあることがわかり、不携帯は交通違反になることを知らせた。	
地域生活への移行	現在、自宅にて両親と共に生活をしている	ご本人は現状がずっと継続していくと思っている様子。母親は親亡き後の単身生活ができるかどうか不安を感じているとのこと。
地域生活力	生活リズムは整っており、基礎体力も十分備わっている。減量と既往症の治療を継続することで健康管理も可能。 ただ、家事全般については、ほとんど経験がなく、現状、できること・できないことがわからない。	両親との在宅生活の中で、生活の大部分を母親が担っているのが通常となっている。 ご本人には切迫感はない。
就労	大学卒業と同時に大手外食チェーン店に社員として就職するが、仕事手順が覚えられず、仕事の段取りも苦手なため、パート社員からのいじめにあい約１ケ月で退職。 その後も一般就労をめざして、若者サポートステーション、生活困窮者自立支援事業等を利用するが、就労には繋がっていない。	ご本人、両親共に、一般枠での一般就労を希望。就労アセスメントの結果、障害者雇用枠での一般就労を勧めているが、障害者手帳の取得については前向きになれず、就労継続支援 B 型事業所で施設外就労活動に取り組みながら、アセスメントと話し合いを続けている。
作業について	～職業適性検査の結果～ 手腕の器用さ、運動共応等の適性能力は標準値。 簡易な作業検査は、口頭説明と例示での補足があれば理解できる。 作業手順が複数ある作業は理解が難しく、手順が前後したり、抜けたりすることがある。 定型反復作業は習熟可能、選別・分類作業等の判断要素を含む作業は効率が下がりミスも多い。 作業量の確認、効率的な作業方法については適宜の助言が必要。 作業内容を十分に理解できていない場面でも、自分で解決しようとする傾向があり、効率の低下やミスが起こりやすい。	心理検査や職業適性検査の結果を通して、作業場面で、ご本人と共に確認、検証をしている。また、職業準備性ピラミットや就労準備性チェックシートの活用により、座学・個人ワーク・実践・記録・面談を繰り返し、一般就労に向けての準備に取り組んでいる。
家族関係	両親・姉がいる。 両親共に 70 代で無職。一歳上の姉は東京で働いており疎遠。 父親は障害受容には否定的。 母親は子育ての中で姉と比べて、発達の遅れ等は感じていたようだが、生後間もなく大病をしたこともあり、過保護に育てたと話している。将来の生活に不安を感じてはいるが、丸抱えの生活を変えることができないとのこと。	ご本人、母親共に、現状に違和感は感じているものの、父親の考えに流され、従う傾向がある。父親の障害受容に向けての支援が重要だが、現在のところ突破口は見つかっていない。 ご本人には、両親以外にも信頼できる人・共に将来の生活を考えてくれる支援者がいることを伝えている。 母親には、母としての思いを傾聴しながらご本人の将来像を一緒に考えようと伝えている。

その他	障害者手帳の取得については、主治医からは、精神保健手帳 3 級の手帳取得は可能と言われている。	障害者手帳の取得については、父親の拒否感が強く、取得について具体的に進められない。
	障害基礎年金については、主治医からは申請不可と言われている。 両親ともに高齢で年金生活をしている。 姉からの経済的な援助はない。	将来、生活困窮に陥る可能性がある。